

「電子図書館レポート2002」の発刊にあたって

近年の先端科学技術研究の特徴として、一つの研究領域が勃興すると短時間にその領域が分化を起し、それぞれが先鋭化の道を歩み始めることと、そのプロセスが同時並行的に世界中で発生することが挙げられる。本学が教育研究活動を展開する情報科学・バイオサイエンス・物質科学領域は正にこの特性をもつ領域であり、このことから本学の附属図書館が提供しなければならない機能は当然領域の特性を十分に勘案した形で実現されていなければならない。これは、各研究者が活動する領域での学術情報を効率よく収集・提供すること、同じ領域で活動する他の研究者の動向を包括的に探索すること、さらに、研究に資する関連学術情報の発見すること、という本来図書館が提供しなければならない本質的なサービスを、各利用者にカスタマイズされた形で、かつ、時間的な遅滞無く、24時間365日提供できることが求められていると言っても良い。この要件こそが、本学の附属図書館が電子図書館実現を平成8年からの7年間にわたり持続的に追求してきた根源であり、さらに従来図書館では実現し得なかった高度な研究者支援機能を実現するために平成10年に設置された研究開発室の存在意義でもある。

これまでの7年間の取り組みにより、本学で稼動している電子図書館システムは実用サービスを提供し、多くの利用者によって日々積極的に使われている。平成14年9月の段階で、総数197万ページ余の書籍・雑誌類、ビデオ1831タイトル300時間余を電子化収蔵物として提供し、およそ年間100万アクセスの利用がある。本学の電子図書館は、パイロット事業として十分な成果を挙げていると言ってよい。

しかし、同時にこの7年間で、電子図書館をとりまく状況も大きく変化した。最大の変化は、雑誌出版元による電子化サービス、いわゆる、オンラインジャーナルの一般化である。オンラインジャーナルは急速に成長・拡大しており、現在の研究現場では不可欠のサービスになりつつある。しかし、図書館が可能としている版元を問わない横断的なリファレンスサービスといった面では、オンラインジャーナルの台頭は著しく現在の電子図書館システムと整合性が悪い状況を引き起こしている。この問題を解決するためには、オンラインジャーナルの一般化にも対応しうる新たな電子図書館モデル、言わば時代に追従しうる新しい電子図書館のあり方を希求し、実現することが不可欠である。

また、社会に対する大学の役割として、大学自身が自己生産するデジタルコンテンツのより一層の提供も強く求められるようになったことも、大きな変化と言えるだろう。この社会要請は、電子図書館において、独自のデジタル

コンテンツ開発能力の向上、さらには、各研究者、教育者達が簡単にデジタルコンテンツを提供できる環境の提供を実現しなければならないという新たな要件を付加した。具体的には、これまでの電子図書館の役割を大きく変え、大学の研究者・教育者が利用できる「デジタルコンテンツ作成工房」機能を提供し、大学が自ら生み出したデジタルコンテンツについて知的財産権管理機能の充実を図らなければならない。これは、これまでの図書館の担ってきた役割とは本質的に異なるものであり、新たな地平を切り開く取り組みとすることができるだろう。このような変化に追従し、電子図書館の機能を発展させていくことは、研究開発室を中心とした活動の中で実現されなければならない。

本レポートは、附属図書館研究開発室の近年の活動を纏めたものである。現在運用している電子図書館システムに直接関連する活動から、将来の電子図書館システムに資すると考えられる萌芽的研究までが含まれる。このような開発研究活動を今後も積極的に展開し、本学の電子図書館に対して成果が転換され、わが国最高水準の電子図書館システムの実現に引き続き邁進することを強く願う。

平成14年11月1日

附属図書館長

山 口 英